（編集部より）

左ページの書評に更に詳しい注釈を加えたものが本号の刊行前に天文学会会員用電子メールネットワークに流れ，様々な議論を巻き起こしました．編集部では天文学会サイドの経緯説明を同時掲載することも必要と判断し，異例ではありますが，ここに学会担当者の説明文を掲載いたします．

Celestiaについて

戎崎俊一（VTRワーキンググループ幹事）

私はVTRワーキンググループ幹事として，Celestiaの監修作業に深く関与してきましたので，西村さんの批判に答えたいと思います．

まず，天文学会がCelestiaの監修を引き受けることになった経緯を説明しましょう．日立アプリケーションシステムズ（以下日立APS）からマルチメディアソフトを作ったので監修してほしいと依頼があって，実務理事有志でプレゼンテーションを見たのは1994年3月の初めです．その時，CD-ROMマルチメディアソフトには天文普及・教育用のメディアとして非常に大きな可能性があるということと，製作者たちの態度が極めて真面目で熱心であることの二点が私の心に強く残りました．現状では，非常にたくさん間違いがありとても世に出せるものではないが，1年かけてきちんと監修すれば素晴らしい天文ソフトができると思いました．その旨を提案しましたが，日立APSとしては，1994年上半期までの販売開始は絶対条件で，とても1年は待てないとのことでした．監修を拒否しても，日立APSは販売を強行するはずです．そうなると極めて不完全な形でCelestiaが世に出ることになります．それは日立APSにとっても，天文学の進歩と普及を目的とする（定款第4条）日本天文学会にとっても望ましいことではありません．そこで，双方歩み寄り，「今年上半期の発売を目指して急いで監修作業を行なう．その代わり，来年度の発売を目指して第2巻を製作する．第2巻は，企画段階から天文学会と日立APSが協力して製作する．」ということで合意しました．第1巻の監修作業は，結成したばかりのVTRワーキンググループのメンバーである私と福江があたることになりました．

監修作業に与えられた時間制限は1カ月以内という厳しいものでした．私と福江は全力をつくしてそれにあたりました．また，日立APSもわれわれのコメントに対して時間が許す限り誠意をもって対応してくれました．しかし残念ながら，説明不足な点や誤りが残ってしまいました．これは戎崎，福江の不勉強，能力不足によるもので深く反省しております．これらの点を修正，補足する文書を作成し，ソフトに添付することを日立APSと検討しています．

次に，このソフトの一つの目玉である「天球シミュレーション」についての西村さんの批判に答えようと思います．「天球シミュレーション」では地球から肉眼で見える星だけを表示し，その明るさは視点が移動しても変わらないようにしています．それは「星は三次元的に分布しており，見る場所が変わると星座の**形**が変化する．」ということを体験的に学習することが趣旨だからです．そうしないと，どの星がどうなったのかわけが分からなくなって教育効果が半減してしまいます．このような「方便」を「反教育的」と切り捨てることは私にはできませんでした．しかし，この「方便」が誤解を招きやすいことは確かであり，それについて説明する文章を添付することを要求しなかったのは戎崎，福江の落度でした．

最後に，Celestia第2巻の製作は，西はりま天文台の石田を中心にVTRワーキンググループメンバーと日立APSとが共同して進めています．マルチメディアソフトの潜在力を十分に生かした質の高い天文ソフトを作ろうと意気盛んです．提案がありましたら石田（ishida@nhao.go.jp）か私（ebisu@chianti.c.u-tokyo.ac.jp）に送って下さい．